



TITLE:

ヨーロッパ哲学の困った癖について
ーポルフィリオスの樹を手が
かりとしてー

AUTHOR(S):

山下, 正男

CITATION:

山下, 正男. ヨーロッパ哲学の困った癖について ーポルフィリオスの
樹を手がかりとしてー. 人文學報 1991, 69: 1-31

ISSUE DATE:

1991-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/48361>

RIGHT:

ヨーロッパ哲学の困った癖について

——ポルフィリオスの樹を手がかりとして——

山 下 正 男

1

現在の文化人類学および比較文化論はいわゆる文化相対主義を採用しているが、哲学・思想も文化の一部だとすれば、当然のことながら哲学史も比較哲学史も相対主義の立場をとるべきであろう。だとすれば、ヨーロッパ哲学とその他の哲学、例えばインド哲学、中国哲学との間で優劣を闘わせ、ヨーロッパ哲学に軍配を挙げるといった態度はよろしくないといわねばなるまい。それどころか、ヨーロッパ哲学はインディアンやアフリカ諸族のもつ思想に毛のはえた程度とまではいわないまでも、少なくともインド哲学や中国哲学との関係ではドングリの背較べだと思った方がよいであろう。

戦後一時期の日本の思想史家の幾人かは、マルクス主義の立場やキリスト教の立場、さらには近代主義の立場から、ヨーロッパの思想・文化を絶対化し、それを座標軸にして日本やその他の民族の思想、宗教、文化を批判し、断罪したが、こういうことはもはややめにした方がいい。

ヨーロッパ哲学は確かに合理主義的な要素を他にぬきんでた割合でもっているが、完全な普遍性を具えているものではない。非ヨーロッパ人であるわれわれ日本人はもちろんのこと、ヨーロッパ人でも心あるひとびとは、ヨーロッパ哲学なるものが困った癖をたくさんもっていることに気付いている。そしてそうした癖はむしろ当のヨーロッパ人よりは他国人である日本人の方がずっとみつけやすいということができる。

このように本論文は文化相対主義の立場をとるものであるが、しかしもう一つの相対主義つまり歴史相対主義をとるものではない。というのも文化を哲学、とりわけ形而上学に限るのであれば歴史相対主義もまたなりたつかもしれないが、形而上学と科学という文化の二つの要素をコミにして考えるならば、形而上学から科学への移行という現象は明らかであり、さらに科学が形而上学に優越していることも明らかだからである。

現代の文化は、誰もが認めるように科学がきわめておおきな比重を占める文化である。そして科学は形而上学と違って正真正銘の普遍性をもつ。それゆえさまざまな形而上学どうしの争

いは、いまや蝸牛角上の争いにすぎなくなってしまうつつある。しかしかつては、形而上学同士
の争い、イデオロギー同士の争いは神々の戦いと評せられるほど烈しいものであった。そし
て現在でもなおその後遺症は残存している。そして文化相対主義も実はそうした争いに対する
解毒剤的な役割を果たしてきたのである。

2

さて問題のヨーロッパ哲学の奇癖であるが、単に奇癖といっても、ヨーロッパ哲学の根幹に
かかわる重大な癖を選びだした方がよいであろう。そしてそのために、いちおうポルフィリオ
スの樹なるものを持ちだすことにしよう。

ポルフィリオスの樹はその最終段階では図1のように上中下の三層からなっているが、初め
のあいだは中下二層だけからなっていた。そしてそれが図2と図3である。図2、図3は一見
してわかるように、図1とちがって、樹のイメージからなり、根と幹と枝をそなえている。ただ

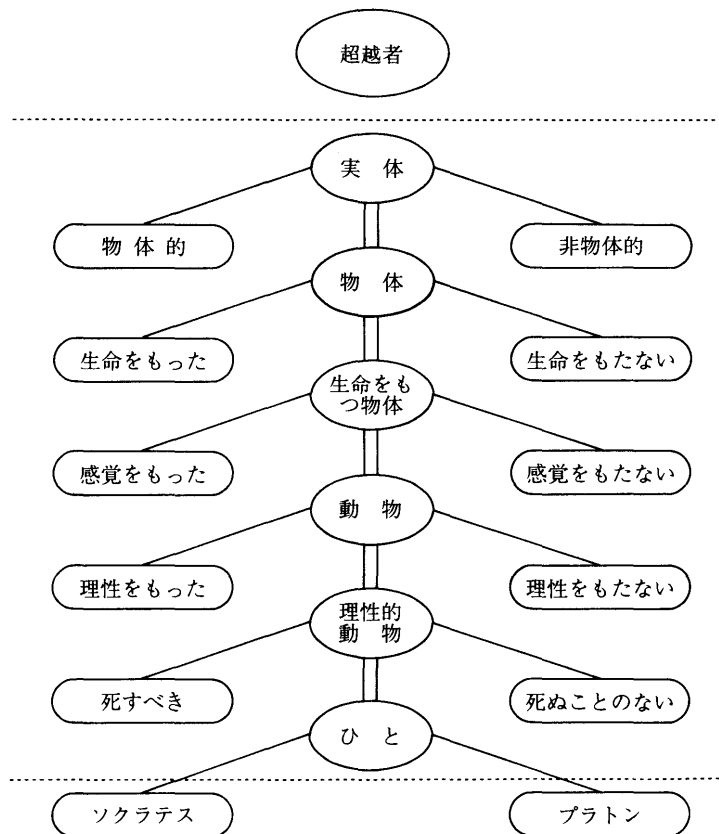


図 1



図 2

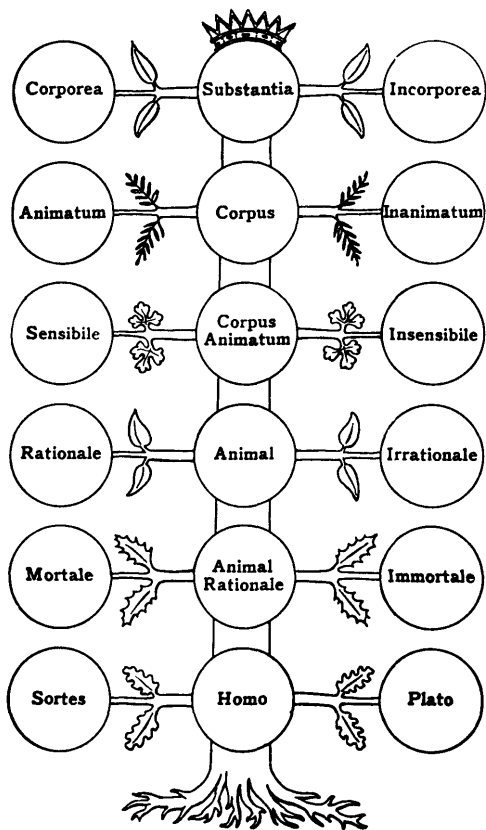


図 3

し図2と図3にはちがいがみられる。すなわち図2ではヨハネス、ハインリクス、ニコラス、ペトルスといった個体は根の部分に書きこまれているのだが、図3ではソクラテス、プラトンといった個体は枝の部分に書きこまれている。しかし図1の三層構造から考えれば、明らかに図2の方が正しいといえる。とはいえ時間的な先後関係からいえば、図3の方が先に出現したのである。そして図2にみられるソクラテスとプラトンの人物像は、樹から遊離した場所に描かれているが、これは根っこの方はヨハネス、ハインリクス等に占められ、しかも枝の部分からも追い出されて、行き場を失ったものと解釈できよう。

ところでいまソクラテスといったが、これは図2、図3をみれば、ソルテス（Sortes）となっている。しかしこれは中世の写字生が愛用した略記的表現である。そしてもちろん特に歴史上のソクラテスを意味しているわけではなく、プラトンでも、ヨハネスでもよかったのである。

このように図2、図3はともに図1の中層下層の二層を根つきの樹木でイメージ化したものであるが、図2、図3のうち特に図3に注目しよう。すると図3の樹木のでっぺんに王冠が見いだせる。この王冠をかぶっているのは substantia つまり実体であるが、この実体はたしか

に最高の位置を占め、王冠を戴くにふさわしい。しかし、ナポレオンのような場合は異例であって、すべての王や皇帝は自分以外のものの手によって戴冠する。つまり crown という動詞は他動詞であり、しかも A が B に冠をかぶせるというわけである。そうだとすれば、いちおう最高と考えられていた実体の上にさらに或る存在があるはずであり、これがほかならぬ超越者なのであり、しかもこの超越者はただ一個でなければならないのである。図 1 は以上のようなプロセスでつくりあげられたのであって、こうした三層構造的思考法が、ヨーロッパ世界を千数百年の長きにわたって呪縛するのである。

3

このような三層をなすボルフィリオスの樹は、いったいどんなことを表示するのだろうか。この樹はけっして神話上の宇宙樹とか、芸術的目的で書かれた装飾などではない。れっきとした論理的構造をあらわすための一種の図解なのである。そこでまず三層のうちの中層からボルフィリオスの樹の絵ときを始めよう。

さて図 1 の中層部分の論理的構造をもう少しわかりやすくしたものが図 4 である。この図で最上段の実体は最高類であり、最下段のひとは最低種である。そして、それ以外の段にあるもの、例えば動物は、生命をもつ物体に対しては種であり、ひとに対しては類であるという二面

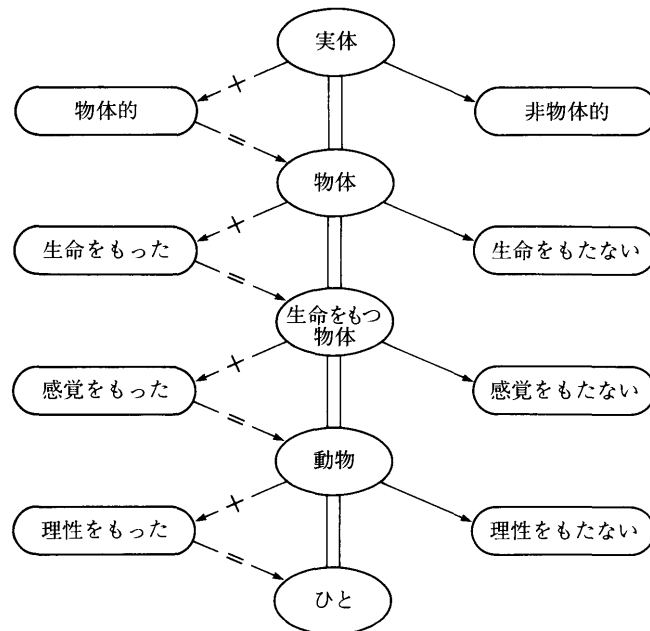


図 4

性をもつ。つぎに中心列の左にある列と右にある列はすべて種差といわれる。そして特に左側の列は、(類)+(種差)=(種)といったやり方で種づくりに大きな働きを示す。そして種差のラテン語 *differentia specifica* は文字通り「種をつくるもの」を意味する。

さて図4の本質的部分は+と=を使った方程式(類)+(種差)=(種)にある。そしてこの種の方程式が図4では合計4本あり、そのうちもっともポピュラーな方程式もしくは等式が(動物)+(理性をもった)=(ひと)である。そしてこれがほかならぬ「ひと」の定義である。

ここで急いで訂正しなければならないのはいまの方程式あるいは等式で使われた+の記号の意味についてである。この記号は実はいまの場合算術の足し等を意味するのではない。なぜなら動物も「理性をもった」も数ではないからである。それゆえ、ほんとうは+といった記号ではなしに \cap の記号を使うべきであり、そうすると(動物) \cap (理性をもったもの)=(ひと)といった等式ができあがる。そしてこの場合(動物)、(理性をもったもの)、(ひと)はすべてクラスもしくは集合であり、 \cap は共通集合をつくる記号であって、日常言語の「と」に当たる。そしてこの「と」は「数を足す」という意味の「と」とは違うのである。

さて図4と、それまでの図1～3とを較べてみると中層部分の中心つまり幹の部分の瘤が、前者では6箇あるのに、後者では5箇に減っていることがわかる。そして時代的には、5つの瘤の図4タイプの方が新しいといえる。ところで減った瘤であるが、それは、理性的動物の瘤であり、図1から3までは、この瘤が左方の「死すべき」と「死ぬことのない」の二つの種差を派生させているが、これらの三つ組が後代では消失していくのである。そしてこの事態の意味は図5を眺めることによって理解できるであろう。

図5は歴史上存在した図ではないが、図1のポルフィリオスの樹が含意するところを明示的に書き現わした図である。図5が図1とちがうところは、中心の幹のところは同じであるが、図1の左の種差はそぎ落とし、右方の種差のかわりに、この種差を類に付加してつくり上げた種をもとの種差の場所に記入したという点である。

さて図5の新しくできた右方の縦列であるが、そのてっぺんはさしあたり埋めることなくペンディングにしておこう。すると残りは上から順に鉱物、植物、獣(狭義の動物)、神となる。そしてこれに中心の幹の最下端にある人間を加える。すると以上5つの要素はすべて図5の端末もしくは終末部分に位置をするという特徴をもつ。

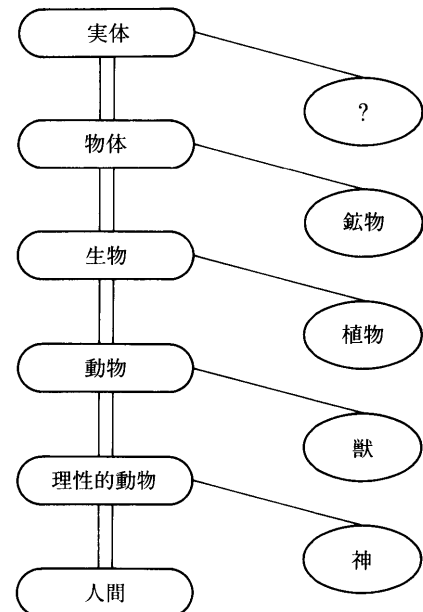


図 5

さてヨーロッパには昔から博物学というものがある。ラテン語では *naturalis historia* という。historia は史の意味ではなしに誌の意味であるから、博物誌といった方がよいであろう。近代の博物学はつい先達ってまで世界中で教えられていたものであり、鉱物、植物、動物の三部門からなるものである。しかし、*naturalis historia* のオリジンであり、紀元1世紀のローマでプリニウスが著した書物『博物誌』は、鉱物、植物、動物以外に人間と神をも扱っているのである。ただしこの場合の神とはキリスト教の神ではなく、ローマ神話の神々である。つまり博物学は文字通り「博く物を集めて、それらを記述する学」なのであり、対象はすべて物でなければならない。そして鉱物、植物、動物（後二者はまとめて生物という）は物がついているからそれでいい。しかし神と人間もまたそこでは物扱いを受けている。そしてこの物とはラテン語でいえば *naturalis historia* の対象である *naturalia*, つまり自然物のことなのである。

図1をみればわかるように、人間も神もともに理性的動物である。そして両者のちがいは一方が「死ぬことのない」という種差をもつことにある。しかし死ぬことのない動物である神も、図5でしめされた通路をたどって上昇して行くと物に達するのである。実際、古代のギリシャ・ローマ人の感覚からすれば、神と人間が通婚するのはすこしも珍しくなく、神もまた立派な肉体と健全な欲望を具えていたのである。このようにして図5は図1ときちんと照合し、しかも古代ヨーロッパ、もしくは古典ヨーロッパ的な世界観と一致する。しかしヨーロッパがキリスト教世界に移行すると事情は異なってくる。なぜならキリスト教の神は肉体などもちあわないし、一子キリストはもうけたものの、ギリシャ・ローマの浮気な神々とは全く異質の神なのである。それゆえ、キリスト教世界では異教の神々の居場所がなくなり、その結果、図1～3および図5にみられる神の座は消失し、図4のような5つ瘤の木に変貌したのである。

4

図1～図5を通観してみると、ポルフィリオスの樹はその根っこの部分にソクラテスやヨハネスが居り、その真上に人間がいるという構成になっている。つまり実体から物体へ降下する勢いはもっぱら人間をめざして一直線に走っているといえる。これはあるいは、ルネッサンス人によって再発見される古典古代のヒューマニズムを象徴しているものかもしれない。ただしポルフィリオスに出てくる「人」は *homo* (man) であって、*humanitas* (humanity) ではない。そして *homo* は普通名詞であり、*humanitas* は抽象名詞である。両者のちがいは「ソクラテスはひとである」といえるが、「ソクラテスは人間性である」とはいえないという点にある。ただし「ソクラテスは人間的存在 (human being) である、もしくは人間的 (human) である」とはいえる。ところで *homo* は名詞であり、*humanus* (human) は形容詞であるが、ラテン語文法では名詞、形容詞を一括して *nomen* というからには両者の間に本質的な相違はない。そし

て図2、図3を見る限り、中央の縦の列に登場するのは名詞であり、両側に出てくる種差は形容詞であるが、そうした名詞と形容詞の差は本質的ではなく、両者とも、クラスもしくは集合であることに変わりはない。

ところで homo（ひと）であるが、実体からこの「ひと」に到達するためには5つのステップを踏む必要がある。そしてどのステップもまず二つの分岐をおこなったうえで、その一方を選ぶという処置がとられる。これはプラトンが始めて提唱した二分法（diairesis, dichotomy）であるが、それより遡らせるとすれば、ピュタゴラスのイプシロンにまで行きつくであろう。イプシロンはギリシア語の字母の一つであり、英語ではワイと発音するがフランス語ではイ・グレック（ギリシア語のイ）、ドイツ語ではそのままイプシロンという。ギリシア語のイプシロンは Υ であり、羊の角のように曲がった枝をしているが、ラテン語以降では Y のように分かれた枝はまっすぐになっている。しかしまっすぐか曲がっているかは重要ではないのであって、とにかくピュタゴラスは Y の字で、右するか左するか的人生上の選択をシンボライズしたのである。

ところでこのピタゴラスのイプシロンであるが、この二分枝の姿が図1から図5のすべてにみられる。ただし図2だけは上向きのふつうの Y であるが、図3では分枝が水平方向に、図1、図4、図5はクリスマスのモミの木のように垂れ下がり Y となっている。

さてこうした二分割をひきおこすものが左右一対をなす種差であるが、この分れ道¹⁾は、第三の道を許さない厳密な二本道であって、この厳密さの保証は、図3のラテン語にみられるように、X と in + X の対でおこなわれる。例えば、理性的動物は mortale（死すべき）と immortale（死ぬことのない）という二つの形容詞によって峻別されるのであり、このことは右側の縦列にでてくる形容詞がすべて in あるいはその音韻上の変形を蒙ったものからなっている事実によって明らかである。このようにピタゴラスの Y がつくられ、それから二者択一がなされるが、この場合のチョイスはひたすら homo をめざしておこなわれるのである。

ちなみに図4において人間の定義は「理性をもった動物」となるが、これはラテン語では animal rationale であり、この rationale は「理性的」という意味をもつ形容詞である。ただしギリシア語の logon echon（理性をもった）の直訳として、rationem habens、または rationalitatem habens という表現もある。もちろんどちらの訳でもいいわけであるが、いずれにしても ratio, rationalitas といった抽象名詞はポルフィリオスの樹では、いまのように対格の形で部品としてはあらわれるが、単独の形ではあらわれない。ポルフィリオスの樹で見られるのは普通名詞あるいは形容詞だけであって、それらはすべてクラスもしくは集合をあらわすもののなのである。

もう一つコメントとしてつけ加えるならば、カントは『人間学』106節で、人間は animal rationale であるだけでなしに、animal rationabile（理性能力を賦与された動物）でもあると定義

している。後者にみられる -abile という接尾語は可能性を意味し、人間は生まれながらに完成された理性的存在というわけではなく、ただ人間となる可能性をそなえているだけであるということの意味する。それだから人間は各自奮闘努力して完全な人間性を実現しなければならないのである。そしてこうした二重の定義は啓蒙思想の完成者といわれるカントに大層ふさわしいものといえるが、それは近世になってからの話であって、ポルフィリオスの樹では *rationale* が登場するだけである。

さきほど *homo* (人間) と *humanitas* (人間性) とのちがいにこだわったが、それには理由がある。ヨーロッパ哲学の奇妙な癖の一つとして、形式——素材 (形相—質料)、抽象化——具体化という枠組の頻用がある。これら二つのペアは、(形相)+(質料)=(具体) と (具体)-(質料)=(形相) の二式で構造化されており、第一式を具体化、第二式を抽象化という。いまは仮にプラスという記号を使ったが、具体的なもの (*concretum*) が *forma* と *materia* の算術和だということではない。というのも *forma* も *materia* も量ではないからである。*concretum* とはそんな単純なプラス関係ではなしに、*formed matter* (形相化された質料) もしくは逆に *mattered form* (質料化された形相) とでもいべき存在なのである。

そもそも形相というのはプラトンが考え出し、アリストテレスが受け継いだ概念であるが、文法でいう抽象名詞に相当するものである。英語で *redness* は抽象名詞であるが、形相がこの *redness* に対応するとすれば、具体は *the red* (X), もしくは *something red* に対応し、それゆえ質料は X もしくは *something* に相当する。この点はドイツ語の方がもっとすっきりしており、形相：具体：質料 = *das Rot* : *das Rote* (X) : (X) あるいは *Rot* : *Etwas Rotes* : *Etwas* となる。だとするとここでは先に述べた (形相)+(質料)=(具体) といった等式もなるとかなり立つように見える。しかしそもそもアイデアや、形相—質料といった概念は、文法的カテゴリーを支えにしているだけであり、論理のカテゴリーとしてはなんの意味もないしものである。アリストテレスは確かにそうした形相 (*eidos*)—質料 (*hyle*) の対立概念を利用しはしたが、彼の本領はむしろ、種 (*eidos, species*)—類 (*genos, genus*)—種差といった形で *eidos* の概念を改変した点であって、こうした三つ組はまさにクラスもしくは集合として、現代のクラス論理学の一部として十分意味をもつものである。

以上のような意味で、ポルフィリオスの樹の中に *homo* が出てきて *humanitas* が出てこないというのは大層喜ばしいことなのであって、このことはポルフィリオスの樹が形相—素材といった概念枠組をはっきり拒否し、現代的なクラス論理学への第一歩を確立したという点は高く評価されねばならない。

5

ポルフィリオスの樹が形相、質料の枠組から解放されたものであるからには、なおのこと実在の世界からも解放されていることはあきらかである。図6は16世紀のものであるが、さし当たりいま重要なのは階段である。この階段は scala と書かれているが、これは8段からなっている。この8段にはそれぞれ文字が書き込まれているが、下から順に挙げてみると、(1)石、(2)炎、(3)植物、(4)獣、(5)人間、(6)天、(7)天使、(8)神である。ところでこの順番は明らかに図5の順番と逆である。つまり図5では上から鉱物—植物—獣の順で下りてくるのに、図6では下から石—植物—獣の順で上って行くのである。ヨーロッパ古代、中世のコスモロジーからいえば、図6の階段の方が当然なのであり、最低の存在である石から段々と上昇して行き、人間、天使を経て最後には天に在す神に達するというわけである。こうした階段は、「存在の大いなる連鎖 (the great chain of being)」、 「存在の梯子 (ladder of being)」、 「存在の階段 (scale of being)」、 「存在のつながり (connexio rerum)」、 「存在のきずな (bond of being)」等々と呼ばれるものであり、2000年にわたってヨーロッパ人の考え方を支配してきた。しかしこうした階段は文字通り存在論的 (ontological) な階段である。それゆえポルフィリオスの樹のような論理的階段とは上下が逆になって当たり前なのである。実際、ポルフィリオスの樹は scala praedicamentalis (カテゴリーの階段) と呼ばれてきたのであり、それはアリストテレスの10個のカテゴリーのうちの筆頭である実体のカテゴリーにおける類と種の階段を示すものである。そして図6であらわされる存在論の階段は近代ではもはや支持されず、形而上学的階段として捨てられたのに対し、ポルフィリオスの樹であらわされる論理学の階段は手なおしが必要であるとはいえ、いまなお使用に耐えるものといえることができる。

いちおうポルフィリオスの樹を近代のクラス論理学の先駆であると評価はしたが、ポルフィリオスの樹はそのままでは到底使いものにはならない。古代、中世のヨーロッパ人はいちおうクラス論理学をポルフィリオスの樹



図 6

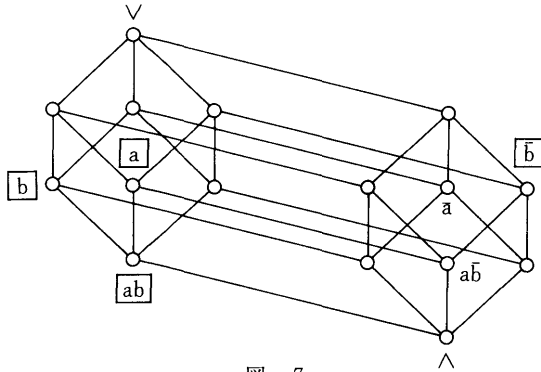


図 7

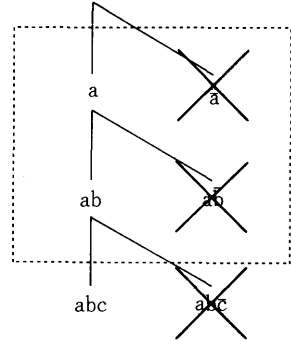


図 8

の幹の部分で図示した。しかしこれは恐ろしく不完全なものであったのであり、その完全形つまり図7との間には非常なへだたりがある。そして古代から近世にいたるヨーロッパ人がポルフィリオスの樹という枠組で論理的思考を行っていたのに対して、健全な現代人そしてすべてのコンピュータは、図7つまり数学でいう束 (lattice) でものを考えているのである。

それではそうした束とポルフィリオスの樹はどういう関係にあるのだろうか。答えは、図7の中にポルフィリオスの樹が埋め込まれているといったものである。すなわち図7のaを「物体」とすれば種差「生命をもった」はbに、「生命をもたない」は \bar{b} に、「生物」はabつまり $a \cap b$ となる。そしてこれら四者は図7で、それぞれ四角で囲まれて表示してあるが、そうした四者の位置と相互関係は、ポルフィリオスの樹におけるそれとおなじである。つまりaは自らの左と右にbと \bar{b} を従え、さらにその真下にabを従えているのである。

類a(物体)を種差b(生命をもった)と種差 \bar{b} (生命をもたない)によって二分し、ab(生物)と $a\bar{b}$ (無生物)という二つの種をつくるのが論理学でいう二分法であるが、こうした二分割をおこなうためには、その背後に図7のような構造を準備しておかねばならない。しかるにポルフィリオスの樹ではa(物体)とb(生命をもった)と \bar{b} (生命をもたない)とab(生物)が出てくるだけで、 $a\bar{b}$ (無生物)はでてこず、さらにその他残りの12個の要素はまるっきりでていないのである。

いま述べたことのうち $a\bar{b}$ (無生物)の存在の無視の意味するところは大きい。ポルフィリオスの樹においてab(生物)はさらにc(感覚をもった)と \bar{c} (感覚をもたない)によって二分されるが、この再二分はab(生物)についておこなわれるだけであって、 $a\bar{b}$ (無生物)についてはおこなわれない。なぜなら図7にみられる $a\bar{b}$ (無生物)がポルフィリオスの樹にはみあたらないからである。

以上のことからポルフィリオスの樹がめざす意図が透けてみえてくる。つまり二分割の装置とは図8にみられるとおりであり、点線の四角い枠で囲まれた部分が図7でとりあげられているわけだが、ポルフィリオスの樹では図7で市民権を得ているa(非物体) $a\bar{b}$ (無生物)の二つ

が見あたらない。しかしこれは実は意図的に消されたのであり、図8で示されたように、二分法の目的は二つの選択肢の一方を残し、他方を消すことだったからである。

6

図1から図4までのポルフィリオスの樹と図7の束とのいちばん大きな違いは、図7で全集合を意味する V と空集合を意味する Λ が図1～図4のどこにも顕在的に書きあらわされていないことである。しかしポルフィリオスの樹の中層部分がクラス論理学の一部を形成するのなら、全集合と空集合もこの樹のどこかに隠されてるはずである。だからこれから図1～図4を隠し絵あるいは探し絵にみたてて、全集合と空集合をみつけだしてみよう。

さて図7は図9の(1)つまり a （物体）と ab （生物）を収容するものにすぎなかった。しかし図9の(2)は ab よりさらに下方へ、つまり abc （感覚をもつ生物）へと延びることを示し、(3)はこんどは上方つまり A （実体）へ延びることを示す。ただし、その場合(3)の枠内の a は物的実体つまり Aa となるが、この Aa は実質的には a とおなじものである。このように図9の(1)が(2)になったり(3)になったりすることは可能であるが、そうなるとももちろん図7ではおさまり切らなくなって、図7よりもっと複雑な束がつくられる。

さて問題は図9の(3)の A についてであるが、これはポルフィリオスの樹では実体となっており、最高類である。しかし問題は、この A （実体）は V つまり全集合そのものであるか、それとも A に対しては \bar{A} （非実体）があり、 V はそれらのうえにあるのかである。つまり $A=V$ であるか、 $A \neq V$ で $A \cup \bar{A} = V$ であるかである。そしてもし前者であれば $\bar{A} = \Lambda$ となって \bar{A} は空集合となるが、後者であれば \bar{A} は空集合でないということになる。

ところで問題の \bar{A} であるが、 A を実体とすれば \bar{A} は非実体となる、ちなみに実体に相当するラテン語は $substantia$ であるが、非実体に対するラテン語の名詞はない。また英語にもないが、ただ英語には $insubstantial$, $unsubstantial$ という形容詞はある。また $insubstantiality$ や $unsubstantiality$ のような抽象名詞形はある。しかし後者は抽象名詞だからポルフィリオスの樹には乗らない。それよりはむしろ $the substantial$ と $substance$ を等値だとし、 $the insubstantial$ をそれらと対置しうるクラスだと考えた方がよいであろう。とはいえそれもいささか苦肉の策だといわなければならない。そしてそうした苦しい処置をとらねばならないのもポルフィリオスの樹の権威が余りにも重く、この樹のてっぺんにある $substantia$ というものが王冠を戴いてしっかり鎮座しているも

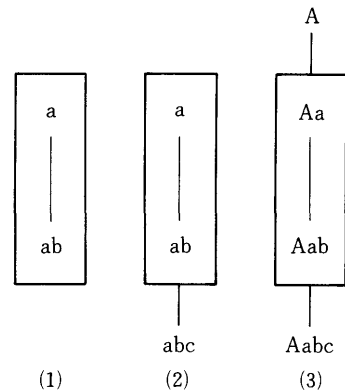


図 9

のだから、*substantia* の反意語 (antonym) である名詞も現われにくかったのだといえよう。このように *substantia* はポルフィリオスの樹の中にある限り、全集合もしくは普遍クラス (全体クラス, universal class, V) の代名詞となってしまう、そのことが、全集合等々の概念を生みだすことを19世紀になるまでじゃまし続けたといえるかもしれない。さらに *substantia* の至上性はまた空集合、零クラス (null class) の創出をもさまたげる。というのもそもそも *substantia* の反意語すら出てこなかったのだから、非実体が空集合のことかもしれないという認識もまた生まれようがなかったのである。

このようにポルフィリオスの樹を後生大事に護り続けている限り、非実体なるものも、全集合も、空集合も表面には出てきにくかったのであるが、しかしヨーロッパ人はそれでも *unsubstantial* なもの、非実体的なものとはなんぞや、そしてそれは存在するのかという問題に対して好奇心を持ち続けてきた。実際この *unsubstantial* もしくは *insubstantial* なものの内容はいろんなもので埋められてきたが、それは非実体という語感からして、虚構、夢幻、非現実的なもの、論理的矛盾、はては亡霊といったもののまが宛てられた。そしてそれらが空であるのか空でないのかが激しく争われた。しかしポルフィリオスの樹に縛られている限り、そうした問題はシャープな論理学上の問題として処理することはできなかったのである。

7

insubstantial の問題はもともとポルフィリオスの樹では生じにくい問題であるが、*incorporeal* (非物体) の問題は、枝の中にちゃんと出ているのだから、昔から堂々ととりあげられてきた。ただし、ポルフィリオスの樹では形容詞形が出てくるだけで、*incorporea substantia* というものは登場せず、切り捨てられている。そしてその内容についてポルフィリオス自身はなにも述べていない。しかしこの非物体的実体には中世スコラ以降、*substantia spiritualis* (霊的実体) が宛てがわれ、さらにそれは *spiritus* (霊体) そのものだとして、その実例の筆頭として天使たちが挙げられるようになった。このようにカトリック公認の哲学や神学ではこの非物体的実体は天使であるが、非物体的実体が *spiritus* だということになれば、肉体をもたぬ純粹霊体として天使以外に、Holy Spirit, Holy Ghost (聖霊) も含めてよいし、the Spirit として God も含めていいではないかということになる。というのも聖書ヨハネ伝4章24節で「神は霊なり」といわれているからである。さらに降って墮天使といわれる悪魔もその仲間に入りたがり、ついでのことに *sprite* (妖精) まだがその名前からして非物体的実体への市民権を要求するようになる。

ポルフィリオスの樹はもともと古代ギリシャ末期の異教的精神風土からうまれたものであり、不死なる神もりっぱな肉体をもつ存在であった。しかし中世ヨーロッパになるとそうした肉体

をもつ神は異教の神として、前述のように永久に追放され、それどころか、「不死なる理性的動物」というポストそのものが削られ、不死であるはずの神々が死んでしまう。そしてそのかわり、非物体的実体、霊的実体の場所が大いににぎわうということになるのである。

このようにポルフィリオスの樹は古代から中世へと大変貌をとげるが、さらに中世から近世にかけてもそれに劣らぬ大きな変貌をとげる。そしてそれをおこなったのが近世ヨーロッパ哲学の祖であるデカルトである。デカルトは周知のように *res*（もの）を *res extensa*（延長するもの）と *res cogitans*（思惟するもの）に峻別した。これが近世二元論の始まりであるが、これは明らかにポルフィリオスの樹の物体的実体と非物体的実体の改訂版である。

デカルトのこの二分法はその後のヨーロッパ人のものの考え方の上に猛威をふるう。まず延長体と思惟体との二分法をもう少し矮小化した形で身体と精神、身体と心といった二分法が定着する。しかし他方ギリシャ以来の質料もしくは物質つまり *Materie*, *matter* というものも復活する。というのも、非物体的実体は、中世で *spiritual substance* と等値され、これはさらに *immaterial substance*（非物体的実体）と等値されたが、そうなることに對置されるものは *material substance* だということになるからである。こうしてポルフィリオス的二分法、デカルト的二分法は物質（*Materie*）対精神（*Geist*）、物質（*Materie*）対観念（*Idee*）といったものになる。そしてこうした二元対立はただちに唯物論と唯心論、唯物論と観念論といったものに成長し、一人歩きを始める。さらにこうした二元対立は自然（*Natur*）と精神（*Geist*）といったものの対立にも発展する。

ポルフィリオスの樹のもともとの形態は、図5で示したようにプリニウスの自然誌、博物誌に対応するものだといえる。そして図5で？の印のついた部分はむしろ中世になってから肥大してきたものといえる。だとすると近世の唯物論の立場は案外、ポルフィリオスの樹のイメージに忠実なのかもしれない。精神や魂が図5の？のコーナーにとじこめられたとすれば、ポルフィリオスの樹の構造上、動物や人間は精神も魂もないもぬけのからとなるわけで、そうした状況から動物機械論や人間機械論が生まれてくるのは当然至極だといえるであろう。

『人間機械論』を書いた唯物論者ラメトリーは、しかしまた『魂の自然誌もしくは魂の博物誌（*Histoire naturelle de l'âme*）』を書いた。これは題名からもわかるように魂を物、しかも自然物としてとらえているわけで、彼は魂を？のコーナーから奪還したものだといえる。そしてそれゆえラメトリーは確かに *materialist* ではあるが同時に *naturalist* であり、さらには *natural scientist* だとさえいえるであろう。

実際、ラメトリーは、ポルフィリオスの樹の立場、そしてその基礎にあるアリストテレスの立場に忠実である。ポルフィリオスの樹では *corpus*（物体）+ *animatum*（生命をもつ）= *corpus animatum* であった。この *corpus animatum* は *corpus vivens*（生ける物体）とも書き替えるように、生物という意味である。ところで *animatum* という形容詞も *vivens* という形容詞も、

anima という名詞, vita という名詞を含んではいるが, それらと同じではない。つまりポルフィリオスの樹では anima (魂, 生气) も vita (生命) も, 単独の名詞形ではでない。それら両者は animatum や vivens という形容詞の中にだけ存在し, しかもこれらの形容詞は corpus (物体) という名詞に依存する形で使われているのである。それゆえ魂や生气や生命をそれぞれ実体として独立させることは, ポルフィリオスやアリストテレスの真意に反する。ポルフィリオスやアリストテレスは corpus animatum という表現からもわかるように主体はあくまでも物体ないし肉体に置かれているのであり, 生命や魂はせいぜい肉体の一機能 (function) にすぎないのである。

とはいえそうした至極当たりまえの意見を述べたラメトリーがなぜ無神論者として弾圧されたかといえは, それはひとえにキリスト教のつくりあげた神学的ドグマによるものであり。キリスト教はもとといえは生气にすぎなかった anima を魂と解釈し, さらに霊魂にまで昇格させ, corpus animatum から anima を分離独立させ, 図5の?の位置に祭りあげたのである。それゆえそうした高貴なる anima をもとの生气に引きもどし, 魂は肉体の一機能にすぎず, 肉体に完全に依存するものであるといった古来からの思想はかえってキリスト教に背く罪だと断定されたのである。

8

近世哲学はもちろん唯物論だけではない。精神, 霊魂の優位性を主張する唯心論, 物質に対する観念の優位を説く観念論も盛んに活躍した。キリスト教の盛んであった中世では霊と肉との闘いという問題が大いに論じられたが, デカルト以後はこんどは心身問題という形で心と身体の相互関係が論じられ, この問題は現在でもなお延々と研究し続けられている。しかしいまだに最終的な解決がなされたという話を聞かない。

物質か精神かという問題は, 飽きられては再開されるといった繰り返しの連続でもある。What is the matter? (物質とはなにか) という問いは What matter? (それがどうだというのか) という反問で茶化され, What is the mind? (心とはなにか) という問いは, Never mind! (そんなことは気にかけな) という答えで一蹴された。

とはいえ近世でさわがしく論じられた唯物唯心の争いは, もとといえはポルフィリオスに発し, デカルトで蘇生させられたヨーロッパに特有の癖のある枠組からでてきた奇怪なしろものである。とはいえ現代の立場からみれば近世の唯物論と観念論にはどんな意味があったのだろうか。観念論についていえば, これは唯物論者によってむちゃくちゃに論難された。しかしその唯物論もはめられたものではない。つい先だってまで, そして所によっていまなお共産圏では唯物弁証法なるものが信奉され, すべての子供たちに教えこまれてきた。しかしそうし

た唯物論には未来の展望は全くない。

とはいえ唯物論は全くのナンセンスなのだろうか。この問いに応えるためにはデカルトにもう一度立ち戻るだけで十分である。すなわちデカルトはもともと唯物論を唱えたわけではなく、延長をもつものの存在を強調しただけである。そして彼は延長あるものを、彼の創案になる解析幾何で補強したのである。いわゆるデカルト座標はX軸、Y軸、Z軸等をもとにし、原点からのそれぞれの方向への長さによって一つの点の位置を記述するシステムである。そしてX軸、Y軸等は物理空間的な延長つまり縦、横、高さだと解してもいいが、長さ以外に、時間と質量をも延長と考えてよい。そしてニュートンの頃になって始めて、長さ(L)と時間(T)と質量(M)の三つの次元がでそい、その後の物理学ではすべてこれら3種の次元で現象が記述できるようになるのであるが、それら次元はすべてまさに延長そのものののである。ここまでくるともはやデカルトの *res extensa* の *res* は不要となり、延長 *extensio* だけが大切となり、しかもその延長の次元は三種類でいいということになる。そしてこの三種の延長は、古典力学が相対論や量子力学にまで発展しても揺らぐことなく存続していく。

こうとなればもはや *materialism* のいう *materia* なるものは無意味になってしまう。*materia* なるものは、もちろん *mass* つまり質量とははっきり別物なのである。さらに力というものもニュートンによって $f = ma$ と定義され、 m の次元は M であり、 a つまり加速度の次元は $\frac{L}{T^2}$ であるから、結局力は、 $\frac{ML}{T^2}$ の次元となる。さらに仕事あるいはエネルギーは $W = fS$ で定義され S は距離でありその次元は L であるから、仕事、エネルギーの次元は $\frac{ML^2}{T^2}$ となる。ところでアインシュタインが発見し、原爆の理論の基礎となった有名な式は $E = c^2 M$ であり、 E はエネルギー、 c^2 は光速、 M は質量であるが、この式も、 c が速度でありその次元は $\frac{L}{T}$ であるから、 $c^2 M$ の次元は $(\frac{L}{T})^2 M$ であり、これは左辺のエネルギーの次元である $\frac{ML^2}{T^2}$ とめでたく一致するのである。

このように古くからの物の概念、*materialism* の *materia*、*matter* の概念は不要となってしまった。しかし同じ運命が唯心論つまり *spiritualism* にも訪れる。*spirit* や *mind* というものが物質から峻別されたにもかかわらず、いまなお精神力とか心的エネルギーなどということは遣いをする人があとを断たないが、もしそれらの力やエネルギーが物理的なものであれば、それらは精神でも心でもないことになり、他方それらの力やエネルギーが物理的なものでないというのなら、そんなものはえたいのしれぬしろものだとして疑の目でみられても仕方がないであろう。

このように観念論や唯心論もまた現代では大そう分が悪いことになってしまった。そして、唯物論のいう物質のかわりに、新しく質量なるものが発見され、わけのわからぬ *materia* にとってかわったのとおなじように、近代物理学の発生よりはだいぶおくれたが、20世紀になって情報理論が生みだされ、情報の概念が、観念や形相といったものにとってかわるようになるので

ある。

ところで information という名詞のもとになった inform という動詞は give “form” (to matter) という意味であり、そこから imparting knowledge or communicating information という意味になる。これは平たく言えば“通報する”，“伝達する”という意味であるが，impart や communicate という動詞が面白い。これら二つはともに共有させるとか分有させるという意味で例のプラトンのイデア論でいう“個物がイデアを分有する”というときに使われる participate という動詞の使役形である。ところで情報というものはイデアあるいは形相 (forma) とおなじように多くの個物によって share (共用) され、分け取られるが、それでいて物質ならば減るところが情報の方はいっこうに減らないのである。このように情報 (information) は forma (形相) という語を含みはするがもちろん materia と対にして使われる昔ながらの forma とおなじものではない。その証拠に、情報は bit という単位で客観的に測定できる量をもつ科学的な存在であるが、forma や idea (観念) はいまだにつかみどころのない存在なのである。そして興味深いことに情報量の単位であるビットは無名数 (absolute number) であり、長さと時間と質量のどれからも自由なのである。そしてこのことはデカルト以来の物質と観念との峻別を再現しているようにも思われる。

デカルトは cogito ergo sum のスローガンによって近世観念論哲学の祖とされているが、しかし彼の本領はむしろ解析幾何学の発見によって、「延長するもの」という概念を展開させたことにある。しかし res cogitans の方はその展開に際してはアリストテレス以来の古い論理学や、それ以下の性能のテクニクしか使えなかったものであり、このことが近世観念論の不毛の原因であった。しかし、その後解析幾何学及び解析学といった数学とは別のテクニクである数学的論理学や情報数学の開発によって res cogitans は情報科学の衣装をまとして脚光を浴びるに至ったのである。

9

以上述べたところから近世の物質—観念や、身体—心といった二元論の失敗が理解していただけたものと思う。しかしそうした失敗にもかかわらず、新しく生まれた物理学を中心とする自然科学と、情報理論を中心とする情報科学との二元論は結局それ以前の物心二元論の産物だから、古い哲学的二元論も評価せよというならばヨーロッパ思想のひいきのひき倒しというべきであろう。古い二元論はもはや虚妄だとわかったのであり、確かに「うそから出たまこと」といわれるように虚偽から真理がうまれることは十分ありうるが、だからといっていまさら虚偽が虚偽でなくなるわけのものではない。虚偽だとわかってもそれを産みだし、それではぐくまれたヨーロッパ人にとっては一つの伝統的遺産として愛着の対象となり、そうした理論も、

現代の理論の創生へと続く長い道程のラスト・ステージだったという評価も成り立ちうるかも知れないが、ヨーロッパ人でないわれわれにとってはそんなものにつきあう必要は毛頭ないといふべきであろう。

ここでもう一度図5にもどるが、いままで？の部分つまり非物体的実体の空所をキリスト教的教義によって精神というもので埋めるといった立場を扱ってきた。しかし物体的実体を「有体物」とし、非物体的実体を「無体物」とする伝統もある。そしてそれは古代ローマに成立したローマ法における法的諸概念の伝統である。ローマ法の場合、実体といった哲学用語ではなしに *res*（物）といった語が使われる。そしてこれは *res corporales*（有体物）と *res incorporales*（無体物）に分けられる。そして前者は土地・建物・衣服・金銀・奴隷を指し、後者は経済的価値をもつ諸種の権利²⁾を指す。

近代になって登場した電気エネルギーは古い概念では有体物とは考えにくいにもかかわらず、盗電という行為を罰するために有体物とみなされるという事態が起こった。また最近では人の知能的活動の所産としての新しいアイデア（発明品、著作、商標、意匠）といった無体もしくは非有体物も、土地、建物と同様に保護すべしといった動きが生まれてきた。そして情報という目に見えぬもの、それゆえ人に取られても減らぬものに対しても、無体物としてではあるが有体物と等資格の位置を与えざるをえなくなったという事態は、物理学とは異なる情報科学の成立という事態と軌を一にするもので興味深い。

しかしそうした事態よりもむしろ古代ローマ法における有体物、無体物の法論理的意味の方がもっと重大である。そこでは法学者ガイウスの理論にもとづき、前述のように有体物は土地、金銀とされ、無体物は権利だとされた。このローマ古法はフランス民法に受け継がれ、フランス法では、物権、人権、無体財産権等が無体物とされた。

こうしたローマ法的フランス法的二分法、つまり自然物、人工物のような物理的存在と権利のような法的存在との二分法は、宇宙の全存在を *ontic*（存在的、自然的）なものと *deontic*（法的）なものに分かつという思想にもとづくものであり、こうした二分法は結局、学問を自然科学（*Naturwissenschaft*）と法科学（*Rechtswissenschaft*）に二分する思想だといえる。これに対し、キリスト教的な伝統は前に述べたように、自然と精神の二分法であり、それに従うと学問は自然科学（*Naturwissenschaft*）と精神科学（*Geisteswissenschaft*, *humanities*）に分かれることになる。この精神科学なるものは近代ドイツで非常にもてはやされたものであるが、*Geist* の概念のあいまいさのゆえに、科学とはいいい難いものであり、自然科学と対等にわたりあうにはいささか実力に欠けるといわねばなるまい。そしてその意味では現在では法科学の方が自然科学との対抗勢力としては遙かに強力な存在だといえるであろう。

ポルフィリオスの樹の幹や枝に当たる類，種，種差の実質的な内容の方に立ち入りすぎた。しかしポルフィリオスの樹は，実体とか物的とかいう内容が大切なのではなく，類，種といった形式の方が重要なのである。実際，実体—物体—生物—動物—人間といった連鎖は確かに連鎖といわれるが，これは図6のような存在の連鎖ではなしに，類と種の連鎖なのである³⁾。連鎖といえば論理学で連鎖式と呼ばれるものがある。例えば「物体は実体である。生物は物体である。動物は生物である。人間は動物である。ゆえに人間は実体である」がそうである。連鎖式という名は明らかにいま述べた類種の連鎖にちなむものであるが，連鎖式の原因 sorites は，堆積されたものを意味する。実際，いま述べた式は五段に積みあげられるのであり，連鎖式のもとをなした5個の類種もまた図4にみられるように5段に積み上げられているのである。

ポルフィリオスの樹は最終的には図1にみられるように三層構造をなす。そして類種それに種差はすべて中層に入り，個物は下層に入れられる。ところが図3をみるとソクラテスとプラトンのような個物が，種差とおなじように枝の部分に入っている。これだと種差と個物の身分的差異がくらまされる。しかしさすがにこれでは困るというので図2では，ヨハネス，ハインリクスのような個物は根の中に入り，自らの身分を明示している。しかし図2も古い図3の伝統をひきずり，ソクラテスとプラトンは根の中に入らず，さりとて枝の中にも入れず，中途半端な場所にほうり出されている。

さて図3におけるソクラテスとプラトンの位置の意味するものは重大である。というのも，種差もまた類種とおなじようにりっぱなクラスであるが，ソクラテス，プラトンの方は個である。しかし図3だと，クラスと個が同一身分であると受けとられても仕方がない。いまクラスといったが，中世の論理学者は類，種，種差をひっくるめて普遍者 (universale) と呼んだ。そして中世では誰一人知らぬ者のない有名な普遍論争がもちあがった。この論争とは普遍は実在するのかしないのかにかかわる論争であり，普遍は実在すると答えたのが普遍実在論者であり，普遍は実在しないと答えたのが普遍は名ばかりだと説いた唯名論者であり，普遍は概念にすぎぬと説いたのが概念論者である。

以上三種の論者のすべては個物が実在することは一致して認めている。とすると図3に拠る限り，ソクラテスという個物が実在するなら，ひとや動物のような類種が実在するのもあたりまえということになり，当然普遍実在論者の方に分があることになる。というよりはそもそも普遍が実在しないことなどありえず，普遍が実在するかどうかの問い自体が起りえないはずである。これに反し図2をみると個物は根っこの方に書きこまれ，普遍と個物は地上部分と地中部分にはっきりと住みわけをさせられている。しかしこのように普遍と個物をきびしく分け

てしまうと、普遍は普遍、個物は個物となってしまう。すると個物が実在するが、普遍の方はどうなのかという、他を顧みてものをいう態度はいささか見識を欠くもののようにみえてくる。つまり個物についてその実在を論じるのは意味があるが、普遍についてまでおなじようにその実在を論じる義理合いはないということになる。そしてもし義理合いがあったとすれば、普遍と個は幹と根この関係としてつながっているというポルフィリオスの樹木のイメージから来たものにすぎないといえるのである。

11

ポルフィリオスの樹にみられる普遍と個の腐れ縁は近代的論理学ではすっぱりと断ち切られる。そしてこの切断のもようは図7によってあきらかである。すなわち近代論理学の一部門であるクラス論理学ではどの場合でもてっぺんにV（全体クラス）を、最下端に Δ （零クラス）をもつ。つまり上方にも下方にも閉じた完全な閉鎖体系をなすのである。そうとなれば、もはや下方に個体があったとしても、それとなんのつながりももたず、同様に上方に超越者があったとしても、それとなんのつながりももたないことになる。このように図7の体系つまり類種の観念体系は、上方の超越者（transcendens）によって超越され、さらに下方の個物（観念からいえば外界）によっても超越される⁴⁾孤立し、独立したシステムなのである。

このように類種の体系が個物と全くつながらないものであれば、個物の実在にひきづられて普遍の実在の問題を論じるという中世の普遍論争はナンセンスとなるのであり、中世のそうした普遍論争が生じたのというのも、ポルフィリオスの樹における普遍と個の切断の仕方が甘かったことからくると考えられる。

とはいえ類種の閉鎖性・純血性はポルフィリオスの樹ではまだよく守られている方である。というのも図3は論外として図2の幹と枝の部分はすべて類と種と種差で固められている。そしてこれら三者によって例えば「動物は感覚をもった生命をもつ物体である」といった命題がつくれる。ところでこの命題は特異な命題、つまり定義文である。定義文にはけっして「すべての」とか「ある」といった語が主語に付加されない。これに反し、三段論法にでてくる命題はすべて「すべての」か「ある」がつく。しかし「All men are mortal（すべての人間は可死的だ）」とか「Some rational beings are men（ある理性的存在は人間だ）」は、その複数的表現からみて、どうしても個体につながっていく。しかし定義文ではけっしてそういう表現をとらないから、個体とはどのようにしてもつながらないのである。こうしてポルフィリオスの樹も、その幹に関する限り、いちおう個体をはじき出しているし、もちろん図7もいっそうの厳しさで個体を締め出しているのである。

クラス論理学におけるクラスの純血性保持の傾向はオイラーの図式においてはいくぶん攪乱

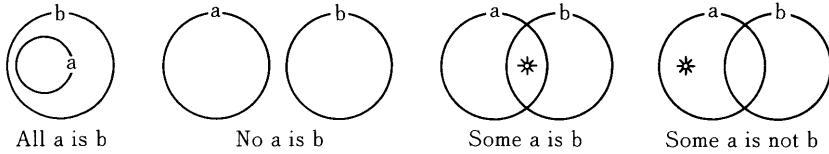


図 10

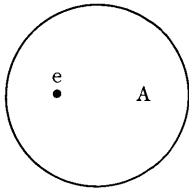


図 11

を蒙っている。図10中の「Some a is b」と「Some a is not b」を表示する図において星印が書きこまれているが、この星印は実は個体をあらわすのである。図10の4種の命題の英語表示は“All a”に対しても“Some a”に対しても is という単数形の動詞で受けているが、これは

円、レンズ形、三日月形のセクションを「一つの」クラスとして扱っているからである。しかし星印を使用しているということは少なくとも二つの特称判断については「Some beings are…」式の解釈がとられていることを意味する。

こうして、ポルフィリオスの樹の中層だけでおこなわれる定義というものがクラス論理学だけの閉鎖系をなすのに反し、全称肯定、全称否定、特称肯定、特称否定の四種の命題を使うアリストテレスの三段法は、個体名辞は使わないが、「すべて」と「ある」を、しかもこの二つのうちとりわけ「ある」を使うことによって個体の存在を認め、そのことによって、ポルフィリオスの樹の根の部分を取りこんでいることができる。つまり一言にしていえばアリストテレスの三段論法は純粹のクラス計算ではなしに、個を認めないクラスの論理学と個を認める論理学との雑種なのである。そしてアリストテレスの論理学のこうした雑種性がその後のいろいろな論争の源となるのである。

図11は『西田幾多郎全集14巻』の「信濃哲学会のための講演」からとった図である。この中にAとあるのは das Allgemeine の略であり「一般」のことであって円で示されている。e は das Einzelne の略であり「個物」のことであって点で示されている。そしてこれはオイラーの図式やヴェンの図式に従うものである。しかもそれはあきらかにクラス論理学の完結性を犯すものである。しかしこの侵犯は別に革新というほどのことではない。それはオイラーの図式はもちろん、それよりもはるか以前から存在したポルフィリオスの樹における幹のクラスと根の個体の同時混在を意味するものにすぎないからである。むしろショッキングなのは、この一般つまり世界、場所というものが無だといわれることにある。というのもヨーロッパ的な思想の枠であるポルフィリオスの樹では個も一般も存在するが、「無」というものは顕在化した形ではみあたらないからである。とはいえポルフィリオスの樹はともかくとして図7のクラス論理学の束の中には無もしくは空というものがその姿をはっきりみせている。それゆえ西田哲学がそうしたヨーロッパ的な思考枠からみては破天荒なのは、「無の場所」という形でVとAの同一性を主張する点にある⁵⁾。しかしこれはこれで一つの面白い考えであるとしても、それを

認めるとその瞬間に16個の要素からなるきれいな構造は一度にひしゃげて一個の団子となってしまうのである。

12

以上で図1の三層のうちの中下二層の説明を終えた。そしてポルフィリオスの樹にたいする現代論理学からの批判は、ポルフィリオスの中層におけるクラスの束構造が不完全であること、クラス構造と個物との身分的断絶が不十分なこと、クラスと個との正当な関係が発見されていないことの三点であった。そして最後の一点を、現代論理学は、クラス論理学ではないもう一つの論理学である限量論理学によってみごとに解明してみせるのである。

こうしてポルフィリオスの樹について残された課題は、図1の上層の解明つまり超越者の解明ということになった。それでは超越者とはなんであるか。ドイツ語に *Reubau* という語がある。これはどの辞書にも載っていない。そして実は中世および初期近世のドイツの学生たちは、この語で6個の超越者の名を覚えたのである。すなわち *Reubau* は 1) *res* (もの), 2) *ens* (存在者), 3) *unum* (一者), 4) *bonum* (善), 5) *aliquid* (或る者), 6) *uerum, verum* (真) の頭文字をつなぎあわせた、それ自身では意味をもたぬ単語だったのである。

このように超越者の内容はわかったが、その定義は、「超越者 (*transcendens*) とは、カテゴリーを超越した (*transcendere*) 名辞もしくは概念である」といったものがふつうである。カテゴリーとはアリストテレスが提唱した10個のカテゴリーのことであり、実体、量、質等がそうである。ポルフィリオスの樹は実は10個のカテゴリーのうちの実体のカテゴリーについてだけのものであり。ほんとは10本の樹木からなる林がカテゴリーのイメージであり、これらの林の上から、月か太陽かあるいは天というたよう形で超越者が見下ろしているのである。

ところでスコラの理論ではさっき述べた6個の超越者はすべて等値されるので、それら6個は名称もしくは概念としては6個であるが、実体は一つであり、この一つの超越者が10個のカテゴリーの上に君臨しているというわけである。いま君臨といったが、この君臨する者は超世界的なもの (*supramundanum*)、超自然的なもの (*supranaturale*) でもなく、いわんや神でもないということを急いで付け加えねばならない。というのはそうしたものは存在の領域で超越者であるが、これから問題にするのは論理学の領域としての超越者だからである。このことはポルフィリオスの樹の幹の部分における概念の梯子段 (*Begriffsleiter*) と図6の存在の梯子段とがちがうのとおなじことなのである⁶⁾。

超越者の概念の始まりはアリストテレスにあるとか、新プラトン派にあるといわれているがよくわからない。しかしトマス の頃には既に6個の超越者が出揃っている。そしてその後 7) *pulchrum* (美), 8) *perfectum* (完全) 等々が追加されていく。本論文は超越概念の歴史をのべ

るのが目的ではないから、その点はほどほどにして、いきなり超越者のはたらきに入ろう。図1でみられるように超越者の下には概念の梯子、類種の梯子がある。ところでこの梯子は実体から始まり5つのステップを踏み降りてひとにまで達するが、類種の階段がそうした合計6個の観念で埋められることの正当性はそもそもどこにあるのか。現に後代では一段はし折られて、図4のように5段になっているではないか。ところでポルフィリオスの樹は単に幹からなるのではない。「ジャックと豆の木」の木のように何本もの枝をつけており、それを頼りに上り下りできるようになっている。そして幹と枝をうまくつなぎあわせると定義が生まれる。例えば「ひとは死すべき理性的動物である」がそれである。しかしこの定義はなぜ正しいのだろうか。なぜ「ひとは翼のない二足獣である」とか「ひとは道具をつくる動物である」でなくて「理性的動物」でなければならないのか。

プラトンの著作と伝えられている『定義集』の121番目に「人間とは羽をもたない、二本足の、平たい爪をもつ動物だ」とある。プラトンは始め「人間は羽をもたない二本足の動物だ」と定義していた。しかしディオゲネスが羽をひきちぎった鶏をぶら下げてきて、これが人間かと迫った。これにはプラトンも閉口して「平たい爪をもつ」を追加した。鶏はかぎ爪をもっているからである。しかしそれでも安心できぬと思ったか、「理性的な知をもつ」の一句を更につけ加える。しかしほんとはそれでも困るので、ポルフィリオスでは「可死的」という種差が付加されているのである。

ところで羽をむしった鶏でプラトンの定義をやっつけたのは、ポルフィリオスの樹の根っこの部分、つまり個体の部分をひっさげて人間概念の定義の偽であることを示したわけである。つまり falsification である。しかし逆にソクラテス、プラトン、ヨハネス、ハインリクス等々をどれだけもち出して人間の定義の verification をおこなっても成功しない。なぜなら人間の個体数はむやみに多いからである。

このようにして定義にかんする限りその定義の真実性を保証するためには、ポルフィリオスの樹の根っこからの支えよりは、むしろ上層の超越者「真 (verum)」による権威づけの方が有効である。そして超越者は実は定義に対するそうした保証あるいは正当化あるいは根拠づけのはたきをその使命とするのである。

13

ふつう「真」とは命題とその命題のあらかず事態との一致のことをいう。しかしポルフィリオスの樹にみられる定義文の真はそうした形では可能でない。それゆえ超越者の真が定義に与えるお墨つきはそうした意味での真ではない。実際、true にはもう一つの意味がある。そしてこれが「まことの」、「真正の」、「本物の」という意味である。この意味での true は true

gold（純金）、true diamond（本物のダイヤ）という風にも使われるが、いまの場合は、true God（まことの神＝キリスト教の神）、true religion, vera religio（まことの宗教＝キリスト教）の場合の用法に近い。さらに bonum（善）に相当する英語の good も good money といったときには本物の金という意味になることからわかるように信頼のおける、確実なという意味となり、true の意味と一致する。

さてスコラ哲学はその哲学に特有のいくつかの公理をもつが、その中の一つに Bonum est diffusivum sui（善は自らを弘宣する）といったものがある。つまり太陽が自らの光をいたる所にふり注ぐように、善は自らの善性をあらゆるものに分け与えるというのである。そして偽ディオニュシオスはこうした太陽の比喩を神の説明に使っている。しかし神のことはさておき、超越者としての善、そして真というものは自らの善性、真性、つまり真正性を惜しみなく流出させる（emanatio）ものである。そしてこの物惜しみの無さはまさにギリシャ・ローマの貴族の大切にせる liberalitas（気前のよさ）の徳目であり、もちろん神の徳性でもあったのである。

さてそうした真正性の流出・沈降は結局、そうした超越者の下にある類種の秩序（ordo）に真正さを与え、さらにいろいろの定義にも真正さをあたえるのである。こうした溢出はまた ens と res について同じようにおこなわれる。すなわち ens（存在者）は秩序と定義に対して entitas（存在性）を与え、res（もの）は realitas（実在性）を与えるのである。

このようにして超越者である ens, bonum, verum, res は類種の階層秩序と、いろいろな定義の真正性を保証し支える働きをもつものであった。しかしそうした verificatio だけではまだ不十分とみえて、さらに justificatio と sanctificatio が追加される。前者はむづかしくいえがカトリックの成義であり、プロテスタントの義認である。また後者は成聖である。しかしもっと軽い意味では前者は正当化、後者は聖化である。しかしこうなれば、もはや「人間は理性的動物である」といった世俗的定義に対する認証でなしに、神学的、宗教的な定義に対する認証だというべきであろう。

実際、スコラ哲学はアリストテレス哲学のような純粹に世俗的な哲学ではなくて、神学をも含む思想体系である。そしてその後にプロテスタント圏内で発生した哲学も、プロテスタント神学とつながりをもつ思想体系である。ところでそうしたスコラ哲学も、それに反抗しつつもスコラ哲学の手法をおおいにとりいれたプロテスタント的哲学も、その体系の主要部分は普遍概念のみを要素とする定義文がその中核をなす。だとするとポルフィリオスの樹の幹、枝の部分の保証と強化のために超越的概念が必要とされるのは当然である。そしてポルフィリオスの樹の場合にはいちおう真正さ（verum, bonum）だけで間にあったのだが、それに加えて justum（正当さ）と sanctum, sacrum（神聖さ）というお墨つきも必要となったのであり、この二つがあたりしく verum, bonum と肩を並べるにいたったのは当然のなりゆきといえよう。とはいえこれらは新参者として、古顔の6つの超越者からは一線を画されたのである。

まえにも述べたように *verificatio* (真なるものと認めること) という語には二義性がある。つまり *vrified by verum* (超越者としての真正さによって保証される) という場合と *verified by individua* (個体例によって検証される) という場合の二つがある。そしてこの場合 *verify* されるのはともに *universalia* (普遍者) である。こうした事態はきちんと図1で表現されている。なぜなら図1の三層のうちの中層をなす類種の普遍者は一方では上方の超越者から、そして他方

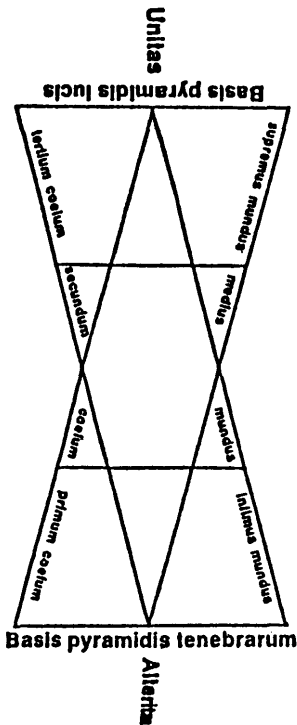


図 12

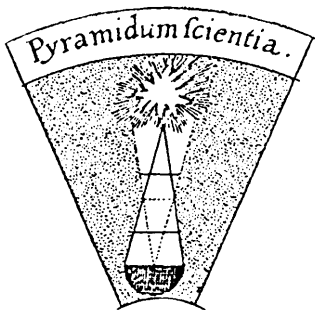


図 13

では下方の個体から支えられているからである。ここで、個体によってささえられているといういい方はいいとして、上方から支えられているといういい方は少々抵抗を感じさせるかもしれない。しかしそうしたい方がいい方が了解可能であることを図12及び図13を使って示すことにしよう。

図12はグザヌスの著作の中に使われているものであるが、直立三角形と倒立三角形が互いに相互貫通もしくは相互浸透する姿である。正立三角形の底には「闇のピラミッドの底辺」と書かれており、倒立三角形の底には逆さまの文字で「光のピラミッドの底辺」と書かれている。倒立の三角形は一性 (*unitas*) の三角形であり正立の三角形は他性 (*alteritas*) の三角形である。相互貫入の三角形は三層に分けられ、最下層は第一天であり、最下世界、中層は第二天であり、中間世界、第三層は第三天であり最高世界である。図13は明らかに図12をもとにしたものであり、イギリスの神秘思想家ロバート・フラッド (1574~1637) の著作にでてくる絵である。そしてここでは倒立三角形の底が光でささえられ、正立三角形の底が暗闇で支えられているのがよみとれる。

さてこれら二つの三角形はなにを意味するのだろうか。実は倒立の三角形つまり一性のそれの方が主役なのであり、正立の三角形は一性の三角形からみてよそよそしい (*alienus*, *strange*) 存在である。神は創造のときに光あれといわれたのであり、闇あれとはいわれていない。キリスト教徒にとって天上の国つまり神の国こそ母国なのであり、この地上の国は異境であり、彼らはそこでよそ者として借り住まいをしている

るだけである。こうした神の国と地上の国の思想はさらにはプラトンのアイデアの世界と個物の世界という二世界説にまでたどりつく。しかし図12はこうした二つの国が別々に存在するのでなしにインターペネトレイトしていることを示す。つまり上方から下方（他性）への道行きはいわゆる疎外（alienatio）であり、下方から上方（一性）への道行きは神との合一（unio）である。フラッドの図13の上に「闇と光の二つのピラミッドについての知」とあるのは示唆的である。神秘主義者であるフラッドがそうした知によって神秘的な知のことを意味しているのはもちろんである。しかしこの絵はヨーロッパ哲学のもつ両棲類的性格をシンボライズしていると解釈することもできるのである。

ヨーロッパ哲学が天上のアイデア界をめざすプラトニズムと、地上の個物（ト・デ・ティ）に焦点を定めようとするアリストテリアニズムとの二つの伝統をひきづってきたとはよく耳にするせりふである。そしてキリスト教の神学も、神の国はもちろん最重要であるが、同時に地上の国もそれなりに評価すべきであるといった二重性の立場を堅持してきた。そのうえ天上と地上を行きつもとどりつするグノーシスの立場、つまり疎外（alienation, Entfremdung）と疎外からの回復によって二つの世界をダイナミックに結ぼうとするさまざまなグノーシスの哲学が跡を断たずに出現する。

ヨーロッパ思想のいま述べた両義性の性癖は現代哲学にももち越されているのであり、一方ではアリストテレスの *episteme*, *scientia*（知）の正統を受け継ぐ科学哲学（scientific philosophy）が存在するとともに、それと呉越同舟的に、超自然学としての形而上学を固く守り続ける哲学者も数多く残存しているのである。

15

さて図1のポルフィリオスの樹と図12, 13との関係であるが、ポルフィリオスの樹は図2, 図3で見られるように正立であり、根は下、梢は上にある。しかしヨーロッパでは古くから、そしてユダヤ人の間でも、逆さの木のイメージがよく使われてきた。これは根っこが天上にあり、幹や枝はすべて下方へ伸びているという図像である。こうした逆さの木とポルフィリオスの樹と、さらに図12, 13の正立倒立の三角形を考えあわせると、図1の中に互いに交叉しあった正立倒立二本の樹の姿を読み込むことは不自然ではないであろう。

このように正立・倒立の二本の樹を考えると、図1の超越者は天上の根（ルーツ）と呼んでいいであろう。図1の中層は種類の居場所であるが、こうした場所を広く観念体系つまりイデオロギー体系だとすれば、そうした体系は一方では下方の個体の根で支えられ、他方では上方の根で支えられる。そしてそれはまたその *origin*（根拠）を二つの国の中にもち、それゆえそうしたイデオロギー体系は二つの祖国をもつ二重国籍者だといえるかもしれない。このような

二つの根源，根拠，基礎は，ともに *Boden, Grund, ground* そして *fundamentum, basis* といわれ，根拠づけという動詞には *begründen, to ground, to found, to base* が数えられる。だとすると，根底，基礎，根拠といったものは下とともに上にもあるといわねばならないであろう。

ヨーロッパ人のこうした両義的感覚は随所で見受けられるが，その一例は *res* という語の二義性である。*res* (もの) は前にも述べたように超越者のうちの一つである。それゆえ *res* および *realitas* は真実在および真実在性を意味する。そして自らの下にある普遍概念に対し，その真実在性を保証する働きをする。中世の普遍論争における一派 *realism* は，後世 *Begriffs-realismus* (概念实在論，実念論) といいかえられるが，これはまさに普遍概念の实在性が超越的实在性によって保証されているということを示唆する命名である。

ところで普遍論争をおこなった三派である实在論者，穩健实在論者，唯名論者のスローガンはそれぞれ *universalia* (普遍者) は *ante rem* (ものより先)，*in re* (ものの中)，*post rem* (ものより後) であるといったものであるが，この場合の *res* (もの) は超越者としての *res* ではなしに明らかに個物としての「もの」である。

さっき述べたように中世以来の *realism* は实在論と訳すべきであり，天上の真実在の国を母国とする立場であるが，近世から始まった同じ綴りの *realism* は現実主義と訳すべきであり，地上の国，個物の国を母国とする立場なのである。

16

二つの交叉した三角形のうち正立の三角形の底辺は，底辺の名に恥じず一番下にある。そしてこの「下」という接頭辞をもつ哲学用語が昔からいくつもつくられた。ギリシア語では *hypokeimenon* (基体)，そしてそのラテン訳である *substantia* (実体)，*suppositum* (基体)，そのドイツ語訳の *Subsistenz, Substrat, Unterlage* 等である。これらはみな“下”という語を含み，下にあってになう者という意味である。そしてこれらの諸概念の居場所は正立三角形の底辺であり，ポルフィリオスの樹でいえば根の部分である。ポルフィリオスの樹において *substantia* は確かに図1の中層のしかも一番上に位置している。しかし個物としての *substantia* はアリストテレスでは *substantia prima* (第一実体) であり，中層ではなしに下層にある。そして中層のてっぺんの *substantia* は第二実体と呼ばれるが，これは中層では最上段にあるが，もちろん超越者よりは下なのである。

このように *substantia* は“下に立つもの”として名実とも一致しているのであるが，近代哲学の用語としての *subjectum, subject* は主体と訳されていることからわかるように，どうみても底辺に甘んじるしろものとは思えない誇り高き存在である。しかしことばとしては *subjectum* は，もともと下にあるもの基体という意味だったのである。

このように subjectum ということばにも二義性がみいだせる。そこでそうした事情を調べてみよう。ens（存在者）と verum（真）は前にも述べたように超越者である。これはプラトンの ontōs on にまでさかのぼらせることができる。ontōs on は文字通りには「存在的に存在するもの」という意味であるが、この「存在的に」は really, verily つまり「実在的に、真正に、真に」という意味である。つまり ens と verum を一語にした ens verum とおなじ意味である。ところが近世になってデカルトは中世スコラの教えるあらゆる存在を片端しから疑い破壊していく。そして疑いに疑った末、cogito ergo sum という命題が示すように、ego（我）の存在にたどりつく、そして、これだけが、indubitum（疑いえぬもの）であり、それゆえ ens certum（確実な存在）だということを発見する。そしてこの ego がやがて subjectum つまり主体と呼ばれるようになる。というのも ego は cogito と sum との subjectum（主語）であり、そのうえ主権的な地位に立つ存在だからである。つまりあらゆる存在を自らの思惟内容とし、しかも思惟する己れ自身、最も存在的、最も真正な存在だからである。こうしてポルフィリオスの樹の根にあったソクラテスやヨハネスはもはや個体としての subjectum ではなしに、主体として、subjectum として最上層の位置にかけ上がり、かつての超越者としての ens や verum の位置にとってかわるのである。

あらゆる存在は自我つまり主観もしくは主体の観念内容であるという近世の主観的観念論は、それ以前の古代中世の存在論からみれば神を恐れぬ人間の思い上がりだということになる。というのも中世では世界は神の観念内容とされていたからである。近世のこうした主体主義、観念論、人間主義をきびしく糾弾したひとりの一人がハイデッガーである。彼は超越者としての ens verum（真正な存在）が vere cogitatum（人間によって真正なる仕方と思惟されたもの）にとってかわられることを存在の忘却ととらえる。そしてそのような忘却された存在、忘れ去られた存在の真正さ（Wahrheit des Seins）をなんとしてでも回復せねばならないと説く。そしてハイデッガーのこうした主張は古くからあるゲノーシスの疎外からの回復説を、ens と verum という二つの超越者にしばって蘇らせたものといえるであろう。

17

デカルトからいきなりハイデッガーへ飛んだのは急ぎ過ぎであった。やはり近世哲学の歩んだ道にはいくつもの曲折がある。デカルトの次に順序としてカントへと移る。そしてカントのおこなった仕事は、transcendens とは別に transcendente（超越論的なもの）を新しく創出したことである。カントは分析判断と総合判断という従来の論理学的二分法を三分法に置きかえた。そしてその三つとは 1) 分析判断（これはすべて先天的判断である）2) 先天的総合判断 3) 後天的総合判断である。1) の例は「すべての物体は延長を有する」であるが、これはボル

フィリオスの樹における「人間(=理性的動物)は理性的である」に相当する。つまり人間の概念を分析すればその中に理性的が含まれているから、そうした種類の分析的命題は先天的に真である。つぎに 2) の例は「7 と 5 の和は 12 である」であり、3) の例は「すべての物体は重い」である。そして 2) と 3) はともに主語概念の分析からは述語が導き出せないから総合的だとカントはいう。ところで 1), 2), 3) のうち、両端の 1) と 2) ははっきりしている。1) はボルフィリオス以来の定義文だから、個体によって経験的にその真正さを示すわけにいかない。だからそれまで通り超越者である *verum* なり *res* なりによって正当化すればいい。そしてこのことをカントは 1) の命題は先天的だという。これに対し 3) は経験命題であるから、超越者の出番はなく、個物的な多数例によらざるをえない。そしてそれをカントは後天的という。問題は 2) のタイプの命題だが、カントはこれを先天的だと主張したかった。しかし 2) は 1) とちがって総合的判断だから、ボルフィリオスの樹の場合のように超越者を持ち出すわけにいかない。そしてもちろん経験を持ち出すわけにもいかない。そこで登場するのが *transcendens* に準じた働きをする *transcendentale* (超越論的なもの) だったのである。

カントからまたいきなり 20 世紀に移るがウィーンで活躍した論理実証主義者は上記の 3 種の命題のうち 1) と 2) をひとまとめにして分析命題とし、3) だけを総合命題とする。そして 1) と 2) は論理的なトートロジー命題だから論理的な真理性をもち、この真理性は超越者の援助も、超越論的なものの援助をも必要としない、他方 3) の命題が真なるためには、個体例による経験的検証がぜひとも必要であるとするのである。

またもとへまいもどることにしてカントの次にシェリングをとりあげよう。図 14 はドイツの哲學家ファルッケンベルグが描いた図であり、シェリングの著『私の哲学体系の叙述』の図解である。上方まん中に絶対的同一性とあるが、この語によってシェリングの哲学は同一哲学と呼ばれる。上方の左右に *Reales* (現実的なもの) と *Ideales* (理念的なもの) との同一が等号で示されている。ただし左方には *Reales* の上に + の印が、右方には *Ideales* の上に + の印が付けられているのは、矩形の左方では現実性が優勢であり、右方では理念性が優勢であることを示す。矩形の内部は対角線によって二分されており一方は白地のまま、他方は縞模様になっており、その模様は左へ行くほど密になっている。さらに図 14 の矩形はまた垂直の中線によって左右二つの矩形に分けられ、図の下方にそれぞれ *Natur* (自然) と *Geist* (精神) と書き込まれ

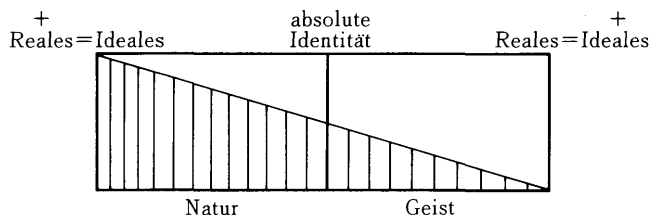


図 14

ている。

図 14 はシェリングの同一哲学の述べていることに対しては忠実ではあるが、せっかく二つの三角形を使用したのだから、クザーヌス以来の伝統

に従って図14を、左の短辺を下にするように直立させた方がよい。すると正立の縞の三角と倒立の白い三角形の合体の図となるであろう。図14のように寝たままだと、自然と精神が横並びになり、まえに述べた図1の中層の自然（物質）と精神の左右二分とおなじになってしまう。しかし図14でわかるように精神は理念と同義だから縦にすることでその超越性がよりはっきりとするであろう⁷⁾。

つぎにヘーゲルに移る。図15はヘーゲルの弁証法の絵ときであるが、とくに彼の著『エンチクロペディー』⁸⁾を例にとれば、大きな三つの円は論

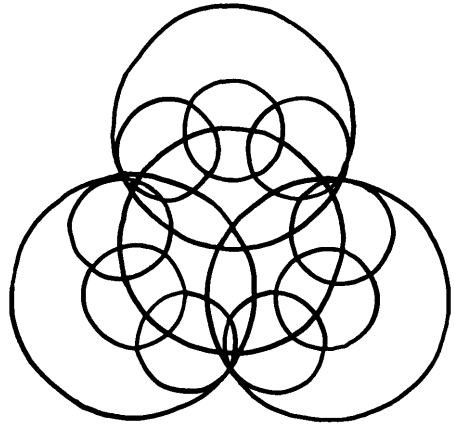


図 15

理と自然と精神の三つに相当する。シェリングは図14でみられるように自然と精神という二項の同一性を説いた。そしてヘーゲルも確かに「理性的（vernünftig）なものは現実的（wirklich）、現実的なものは理性的」といっている。さらにフィッシャー（Fr. Th. Fischer）はヘーゲルの哲学を二階家にたとえ、一階は事実の世界から、二階（das obere Stockwerk）は Idee（理念）からなっており、真にあるところのものは一階でなしに二階にあると述べている。

このようにヘーゲルは一見シェリングの同一哲学に近いようであるがやはり大きく異なる。つまりヘーゲルはシェリングのように二項の同一化でなしに、三項の円環化でものごとを処理するのである。さてヘーゲルのこの円環であるが、これもまたポルフィリオスの樹にみられる概念の梯子段、概念の鎖と関係する。ポルフィリオスの樹では中層の概念の世界だけでなく、上中下三層を貫く梯子段において上昇と下降がおこなわれる。もちろんその場合、同じ一本の梯子が上るにも降りるにも使用される。しかしヘーゲルの円環の場合はちがう。下がる場合、つまり疎外の道行きと、昇る場合、つまり回復への道行きは区別される。しかしこの道程はもとあった場所にもどることによって完結する。そしてヘーゲルのこうした弁証法的巡礼は、イタケーの島から出発し、もろもろの苦難と冒険を重ねてふたたびイタケーへ帰還したオデュッセウス王の物語「オデュッセイア」にもなぞらえることができるのである。

ポルフィリオスの樹は図1でみる限り上中下の三層に区別され、とりわけ上層と中層は峻別されている。しかし図12のような二つの三角形の相互嵌入図では上中下三層の区別がなし崩しにされ、最後には暗闇の中の黒牛のように神秘の幕に閉ざされてしまうことになりかねない。そしてクザーヌス、シェリング、ヘーゲルの流れには確かにその嫌いがあった。しかしヘーゲ

ル以後のドイツ哲学者の多くはシュリング、ヘーゲルの考えにはついて行けず、ふたたびカント的な二世界分離の立場にもどる。そしてそれがドイツの理想主義 (Idealismus) 哲学である。この理想主義はそれが理想主義といわれる限り、もちろん高い理想を掲げなければならない。そしてこの理想は真善美とされた。真と善は超越者の verum, bonum の延長であり、美の方も、中世以来、6 個の超越者の附録として数えられてきた pulchrum がとりあげられたのである。

ところでこうした理想主義はまた自然主義、現実主義、唯物主義と対立するものであった。そしてこうした対立も古くからの二項対立をひきづるものであるが、この二項対立は水平的な対立ではなしに、垂直的な対立となってきたことは確かである。

ディルタイはヨーロッパのすべての形而上学的世界観を調べ尽くし、結局それらは 1) 自然主義、2) 自由の観念論、3) 客観的観念論のどれかに入りうると考えた。またマルクス主義者は唯物論と観念論の二分法を採用した。マルクス主義者が唯物論をよしとし、観念論を捨てるという党派性丸出しの態度をとったのに反してディルタイは自らは三つのタイプのどちらにも与しないという相対主義の立場をとる。党派性うんぬんはさておき Materialismus, Naturalismus そして Realismus (現実主義) のすべてに対して Idealismus (観念論) が対置されているのが確認できる。しかしこうした対置もまた、ポルフィリオスの樹および正倒二つの三角形の枠組におさまるものなのである。

以上長々とヨーロッパの各種の哲学がどのようにしてポルフィリオスの樹におさめうるかを述べてきた。実際、ヨーロッパの哲学者たちは意識的か無意識的かを問わずポルフィリオスの樹に縛られ続けて彼らの哲学的な営みをおこなってきた。そういう意味でまさしくポルフィリオスの樹はパラダイムの名に価するものといえる。しかしこのパラダイムは20世紀に入って捨て去られる。そしてこのような2000年に一度といったヨーロッパ人の思考のパラダイムの大変換と、旧パラダイムの廃棄の状況は拙稿「形而上学の虚妄性」(『人文学報』68号, 1991年)で詳述したとおりである。

パラダイムがこのようにかわってしまったからにはもはやポルフィリオスの樹という古いパラダイムはヨーロッパ人が持ち続けてきた困った癖としかいいようがないものとなる。つまりもっと癖のない普遍的で素直なパラダイムを使う方が万事都合がいいのである。しかしポルフィリオスの樹はジャックと豆の木のようなお伽話⁹⁾というには余りにも大の大人たちの心性を芯から支配し続けてきた。そしていまでもその残留効果は強烈である。そのためには当分の間哲学史家は後始末的な整理が必要かもしれない。そしてその場合、人類学的な手法、とりわけ構造主義的な人類学の方法でクールに対処した方がいいであろう。しかしいま哲学者にとっても新しいパラダイムを使って現在緊急な諸問題の解決に全エネルギーを投入することの方が遙かに有意義な仕事となってきたといわなければならない。

1) 枝、特に二股の枝は英語で twig といい、ドイツ語で Zweig というが、これらはそれぞれ two お

ヨーロッパ哲学の困った癖について（山下）

よび zwei（ともに二）から派生した語である。

- 2) 権利は手で触られるものではないからである。ギリシャ以来 soma, corpus とそれ以外のものの識別は手で触れることができるか否かで決められた。
- 3) 存在の連鎖の思想は世界中いたるところにあるが、類種の連鎖はヨーロッパだけである。そしてここにヨーロッパ思想における論理学の比重の大きさが読み取れる。
- 4) transcendent という語は外界が観念を超越しているという意味にも使われる。
- 5) 西田哲学はそれどころか図11にあらわれる一般つまり一と、個つまり多との同一性をも主張する。そしてそれが西田哲学の「一即多」の教義である。
- 6) 注3) 参照。
- 7) 図14は寝ころがったままだと中国の陰陽の巴の図とあまり変わらなくなる。すなわち図14では陰陽とおなじく相対性の意味が強く出すぎるくらいが生じる。
- 8) 西周はエンサイクロペディーを百学連環と訳した。ただしこのエンサイクロペディーは特にヘーゲルの著書を指したわけではない。しかし連環という語は図15のイメージにぴったりである。またエンサイクロペディーという語はその中にサイクル（円）という語を含むが、これも図15とうまくマッチする。
- 9) ジャックと豆の木の話はイグドラシル（世界樹）神話に起源をもつといわれる。

（平成3年7月25日）